

ならしの洋楽事始

—捕虜オーケストラの遺したもの—

星 昌 幸

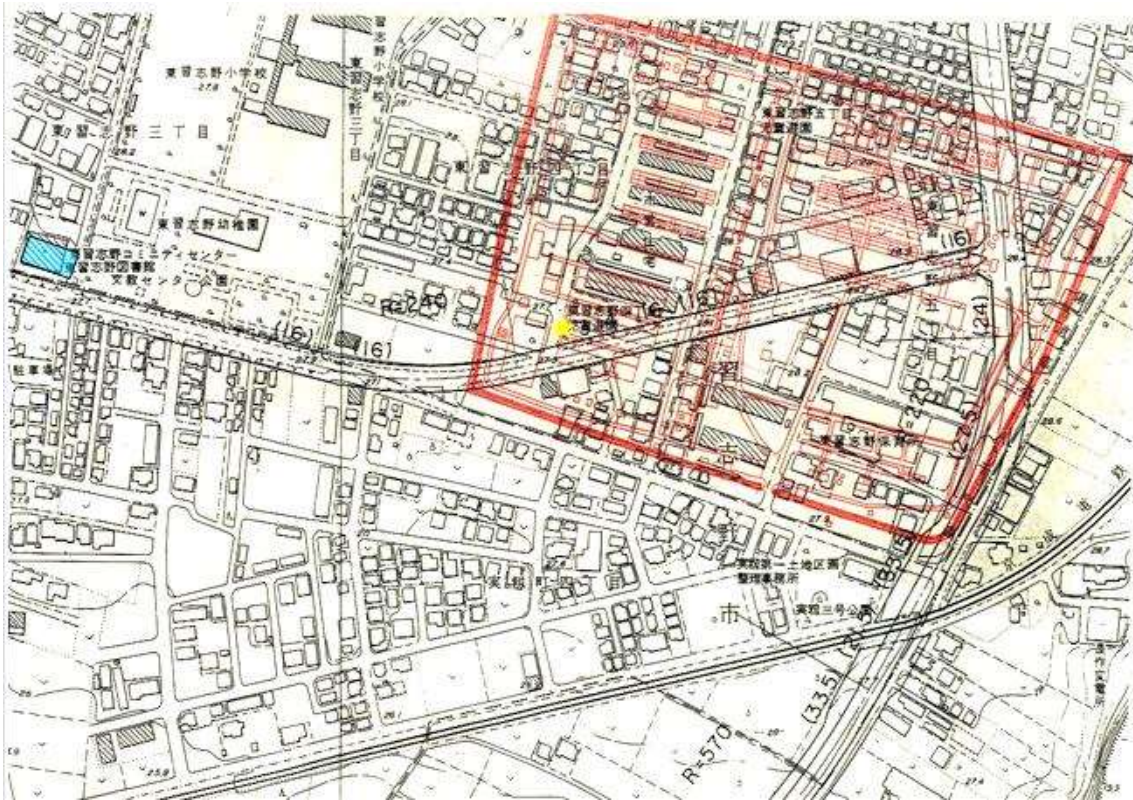
今までケーザー先生から、フリッツ・ルンプについてご紹介いただきました。第二のシーボルトとでも呼ぶべきユニークな日本学者が習志野にいた。しかも彼の研究は今日なお、ドイツにおける日本学の土台になっている。なかんずく、大分と習志野で捕虜生活の間に翻訳した「日本の民話」は、いまだに日本のおとぎ話を紹介するものとして読み継がれている…。習志野はオーケストラといった外国の文化を受け入れる窓口になっただけでなく、日本の伝統文化を海外に発信する窓口にもなった。こういうことを、他の町ならばいざ知らず、習志野の住民の皆さんにはきちんと記憶していただかなければいけないのではないか、と思われてなりません。

さて、後半は私の方から、「ならしの洋楽事始」と題しまして、習志野収容所オーケストラの活動についてご紹介をしたいと思います。今日のこの会場から3分ほど歩きますと、当時の収容所の跡に出ます。現在ここに、「ドイツ捕虜オーケストラの碑」というモニュメントが立っております。



ドイツ捕虜オーケストラの碑

まだご覧でない方は、お帰りにぜひ、足を伸ばしてみてください。



黒い線が現在の町並み、赤い線が収容所ですから、いかに当時と様子が変わったのか、おわかりいただけると思います。青い四角が今日のこの会場、出て左に5分ほど行った、この黄色い印がモニュメントです。

このモニュメントを立てまして、今年の11月でちょうど10年になります。10年前、第一次世界大戦の終結から90年という記念でこれを作ったのですが、市民の税金を使ってくだらないものを、といったお叱りも随分いただきました。また、この町は終戦後、刑務所の町だった。それを先人たちが苦勞して、刑務所を移転させ、習志野高校などを誘致して、やっと文教の町にしてきたのに、また「捕虜収容所」などと言っている奴がいる。何だ、あいつは、といったお話もありました。収容所跡などと言われては、土地の資産価値が下ってしまうのではないかと、といったご心配もあったようです。あるいは、捕虜収容所というどうしても悲惨なものにしてしまいたい方もいるようで、私がオーケストラがあったという「ウソだ。そんなのはヤラセで、いやいや演奏させられていたんだ」とか、例の習志野ソーセージなんかも「捕虜を拷問して、無理やり秘伝の製法を吐かせたんだろう」なんていう方もいます。「収容所があったあたりは処刑場になっていて、何人もの人が殺されたので心霊スポットとして噂になっていた」なんて書かれているものもあります。何ですかね、こりゃ。

40年前、昭和53年に習志野文化ホールができて、そのこけら落しにベートーヴェンの第九交響曲が演奏されました。そのプログラムに鈴木さんという方が、こうい

うことを書いています。後でまた触れますが、徳島県鳴門の板東収容所オーケストラが第九を本邦初演したことを紹介した後、習志野についてこの人は「防衛庁戦史室に眠る資料によると習志野には4,689名のドイツ人捕虜が大正4年から5ヶ年間収容されていたという。この収容所の所長は西郷隆盛の長男西郷寅太郎少将で待遇は厳しかった。そのせいか大正8年にはスペイン風邪が流行し捕虜20数名が死んだ。」と、まるで西郷寅太郎が捕虜を虐待して、栄養失調でインフルエンザに耐えられなかったかのような書きぶりなのですが、西郷さんは少将になっていないし、4,689名というのはこれは日本中の全部の収容所の合計です。だから、この人、防衛庁に調べになんて行っていないなとすぐ判るんですが、平気でこういうウソを書く。

まあ、鈴木さんももうお亡りになってますので、これ以上は言いませんが、今日も例えば、皆さんお帰りになって、「収容所にオーケストラがあったんだって」とおっしゃると、「そんなのウソだよ」「その星とかいう奴にだまされちゃいけないよ」といった声に戸惑われると思います。自分らでお化け話をこしらえて、自分らで縛られている。私が、ドイツ側の資料を持ってもデッチ上げだ、インチキだ、忌まわしい収容所だったに決ってるんだ、という。心霊スポットだか何だか知りませんが、いかに習志野収容所というものが世間に認知されていないか、ということですね。

しかしこの記念碑を立てた趣旨としましては、100年前の戦争でドイツに勝ったことを寿いでいるわけでも、ドイツ兵を捕虜として服従させたことを記念しているわけでもありません。そんなものを立てても、それは時代錯誤もいいところです。そうではなくて、このモニュメントは、ここで捕虜オーケストラがベートーヴェンやモーツァルトを演奏し、習志野の住民は初めてそんな音楽を聴いた。そんな異文化と異文化の出会いがあった場所だということを後世に伝えたいわけです。モニュメントには、こういう写真がはめ込んであります。

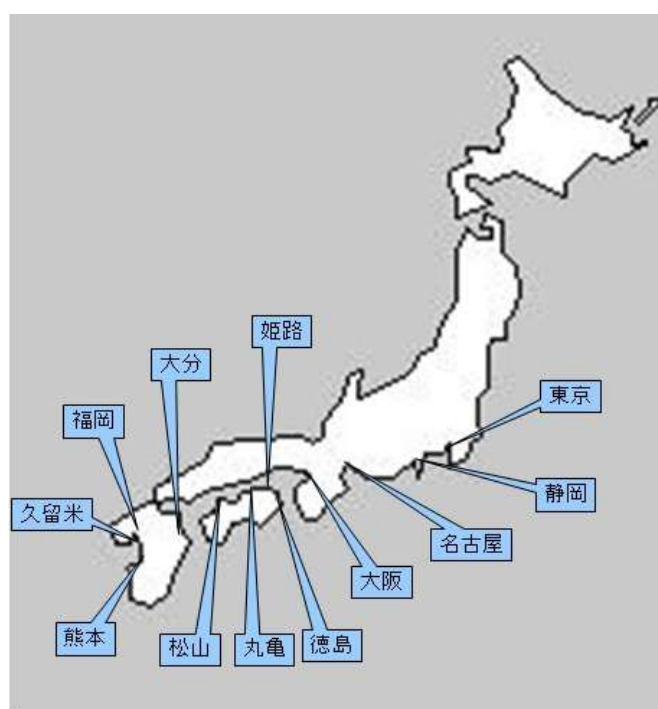


戦争のせいとはいえ、それまで聴いたこともなかった音楽に出会った。彼らドイツ兵も、それまではカイゼルの「黄禍論」、日本人はずるい、黄色いサルだ、などということばかり聞かされてそう思っていた。実際に、鉄条網の周りに集まってきて珍しそうにオーケストラの演奏を聴いている習志野の住民の姿を見て、彼らもそれが間違いだったことを知ったのでした。

そういった異文化との出会いがあった場としてこのモニュメントを作ったのですが、それから10年経ちましてもいまだに、そんなものどこにあるの、見たことない、という方が多いのは少々残念です。

そこで今日は捕虜オーケストラのことをご紹介しようと思うのですが、100年前、まだテープレコーダーもビデオもない時代でしたから、残念ながら彼らの演奏を聴くということとはできません。しかし、習志野原に響いた彼らの音楽は風に乗って、実籾や長作の村はもちろん、遠くは高津とか田喜野井といった村までも聞こえたといいます。彼らの演奏を聴いた方ももう生きてはおられません、収容所跡に立ってみればこの土地、そしてここに生えている木々は、まだそれを覚えているはずです。

幸いなことに、彼らは収容所の中で演奏会を開くときに、必ずプログラムを印刷しています。収容所に謄写版があったのですが、これを使ってプログラムを印刷します。そのすべてが見つかっているわけではありませんが、いくらかはドイツ各地にいる子孫の手元に残されています。それらを見ますと、この習志野で100年前、どんな曲が演奏されたのかがよくわかります。今日はその中のいくつかについて、サワリの部分を聴いていただこうと思います。100年前、他でもないこの習志野の地に、こんな曲が流れていたのだなあということを追体験していただこう、という趣向です。



さて、青島の戦争というのは大正3年のことです。大正3年の秋に日本軍が青島要塞を陥落させ、5,000人近いドイツ兵が日本各地の12の収容所に収容されます。関東では、東京・浅草の本願寺に400人ほどのドイツ兵が収容されました。



所長は西郷隆盛の嫡男・寅太郎でした。



本願寺は今でも、田原町の地下鉄の駅を上がりますと、仏壇屋さんがずらっと並んでいて、その奥に大屋根が見える。隣はもう、合羽橋の道具街です。あそこに400人ほどが入れられて、最初のクリスマスを迎えます。



面白い話がありまして、本願寺の本堂にこの捕虜合唱団が勢ぞろいして、「聖しこの夜」を歌ってクリスマスを祝ったのだと書いてありますから、これは親鸞聖人もさぞビックリしたことでしょう。

この時、ドイツ側もイギリスやフランス、ロシアの側も、これが歴史上かつてない大戦争になるとはまだ思っていないから、ヨーロッパの最前線では勝手にクリスマス休戦してしまう所が続出したといえます。フランス軍が塹壕の中で「聖しこの夜」を歌っていたら、いつの間にか立派なハーモニーが付いている。誰が歌っているのだろうと耳を澄ませてみたら、何と向う側のドイツ軍の塹壕の中から聞こえてきた、などということがあったのだそうです。まだ戦争と言っても、ナポレオンの頃の戦争からたいして変わってはいませんでした。しかしそれから4年半、アメリカや日本まで巻き込んで、世界大戦が続けられている間に、戦争というものの質がガラッと変わってしまいました。

空では飛行機が、空中戦をやったり爆弾を投下したりするようになった。戦車が登場して、逃げまどう敵兵を踏みつぶしながら驕進し、砲撃をするようになった。風上から毒ガスを流して敵陣を皆殺しにしよう。潜水艦で敵の商船を沈めてしまおう。そして最後には、「戦略爆撃」というものが始まります。戦争とは直接関係ない、敵の銃後の都

市に無差別空襲をかける。巨大な飛行船にしこたま爆弾を積んで行って、これでロンドンを空襲する。密集する都市の住民をパニックに陥れよう、とまあ、戦争というものの様相がすっかり変ってしまった。恐ろしい現代戦争、絶滅戦争への扉が開いてしまったのがこの第一次世界大戦でした。こうなるともう、「聖しこの夜」どころではないわけですね。しかしまあ、日本では浅草のお寺で「聖しこの夜」を歌っていた。武士道とか騎士道といったものが、まだ色濃く残っている時代でもありました。

このように、既に浅草の収容所で合唱をしたり、ピアノを弾いたり、あるいは蓄音機でレコードを聴いたりということは行われていたのですが、戦争は容易に終る気配がありません。お寺の方も、長くなるようなら、どこか他を見つけてほしいと言って来る。そこで、東京の近くに彼らを収容できる所はないか、ということになり、この習志野の演習場に白羽の矢が立ちます。



習志野では10年前の日露戦争のときにもロシア兵の収容所を作っていますので、習志野なら良からうということになりました。そして、翌大正4年の9月に、浅草の連中が習志野に移転してきます。その他、静岡、大分、福岡といった所にいたドイツ兵が習志野に集められ、一番多い時期には1,000名ほどのドイツ兵、それから戦争に巻き込まれてしまったオーストリア＝ハンガリーの兵隊もいました。

浅草や静岡、福岡などが習志野に集められたのと同じように、最初12か所ほどあつ

た収容所が最終的には6か所に統合されます。



東から、習志野、名古屋。青野ヶ原、これは姫路の北にあった、習志野と同じような陸軍の演習場です。それから四国に行って、徳島県鳴門の在にある板東という所。広島港の沖に浮かぶ似ノ島という島、最後に九州の久留米と、この6つに集約されます。この中で一番有名なのは四国の板東収容所です。ここの捕虜オーケストラが大正7年6月1日に、ベートーヴェンの第九交響曲を本邦初演したのだ、ということで映画にもなって、非常に有名になっています。今年はちょうどそれから100年だということで、これから盛大な記念行事が予定されているようです。ドイツ館という立派な博物館も出来ていますので、皆さん、関西方面にご旅行の際には、ぜひこの板東のドイツ館を訪ねてみるのも面白いと思います。

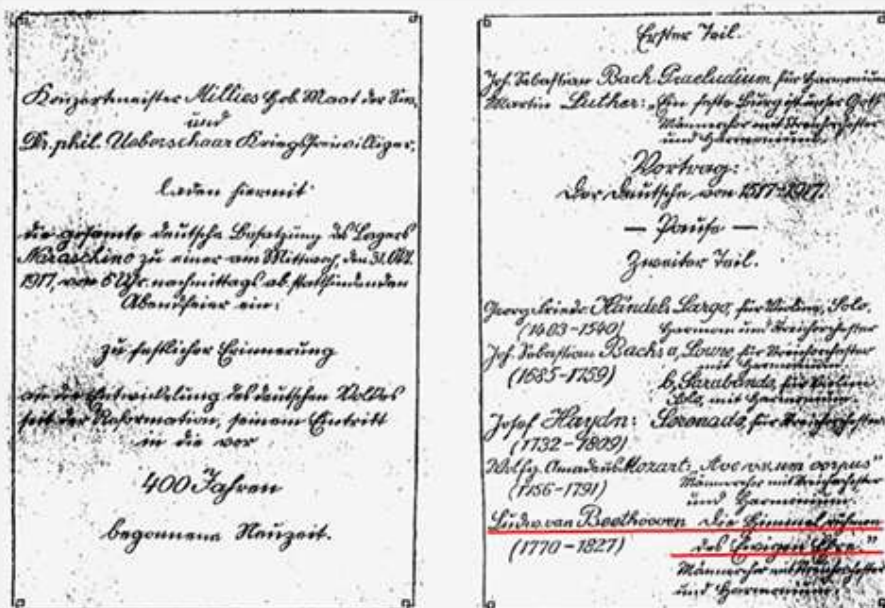
さて、彼らの方でも、早く戦争が終ってドイツに帰ること、つまり、青島の戦は負けてしまいましたが、いずれヨーロッパではドイツ軍が大勝利を納めて戦勝国として迎えてくれるだろう、勝利者としてこの日本を後にする日が来るだろうと固く信じていますから意気軒昂なものです。しかしだんだんと、日本での暮らしが長引きそうな気配になってきた。そこで、それではあり余る時間を使って、本格的に何かやろうかということになってきます。どこの収容所でも、捕虜劇団を作って芝居をやったり、スポーツクラブを作ったり、仲間を講師にして勉強会を開いたり、謄写版を使って新聞を作ったり、といった活動が始まります。

習志野では大正6年の秋に、福岡収容所からハンス・ミリエスというプロのヴァイオリニストが異動してきたことで、それではミリエスに指導してもらって本格的なオーケストラを作ろうということになります。このミリエスという人は、ベルリンの音楽院でヨーゼフ・ヨアヒムという、音楽史に残る巨匠についてヴァイオリンを学んだ人です。



そして、上海にあったオーケストラ、上海というのは御存知のように、中国であって中国ではないような国際都市になっていましたから、西洋式の立派なオーケストラがありました。そのコンサートマスターになって活躍している内に日独戦争になってしまい、青島に召集されて、日本軍と戦って捕虜になった、という経歴の持ち主です。

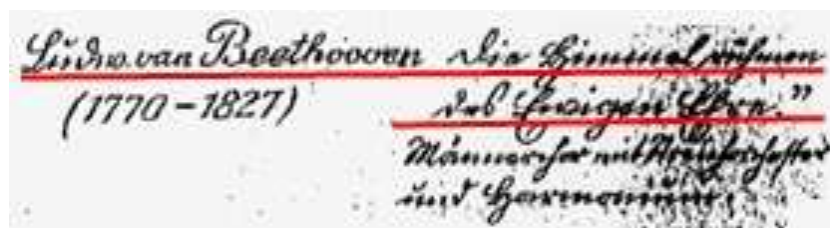
習志野に移されてしばらくした大正6年10月31日、この時、偶然にもドイツのマルティン・ルターが宗教改革を行ってからちょうど400年という記念日がやってきます。そこでミリエスは、それを記念する演奏会を開きます。



宗教改革400年記念の夕べ 大正6年10月31日

これがその時の謄写版で刷られたプログラムですが、浅草から活動をしている合唱団と、ミリエスのオーケストラ、その共演で盛大にお祝いの曲を演奏しています。そしてそれが、習志野の地にオーケストラというものが産声を上げた瞬間でした。

それでは、その時の曲をちょっと聴いていただきましょう。ベートーヴェンの「自然における神の栄光」という曲です。

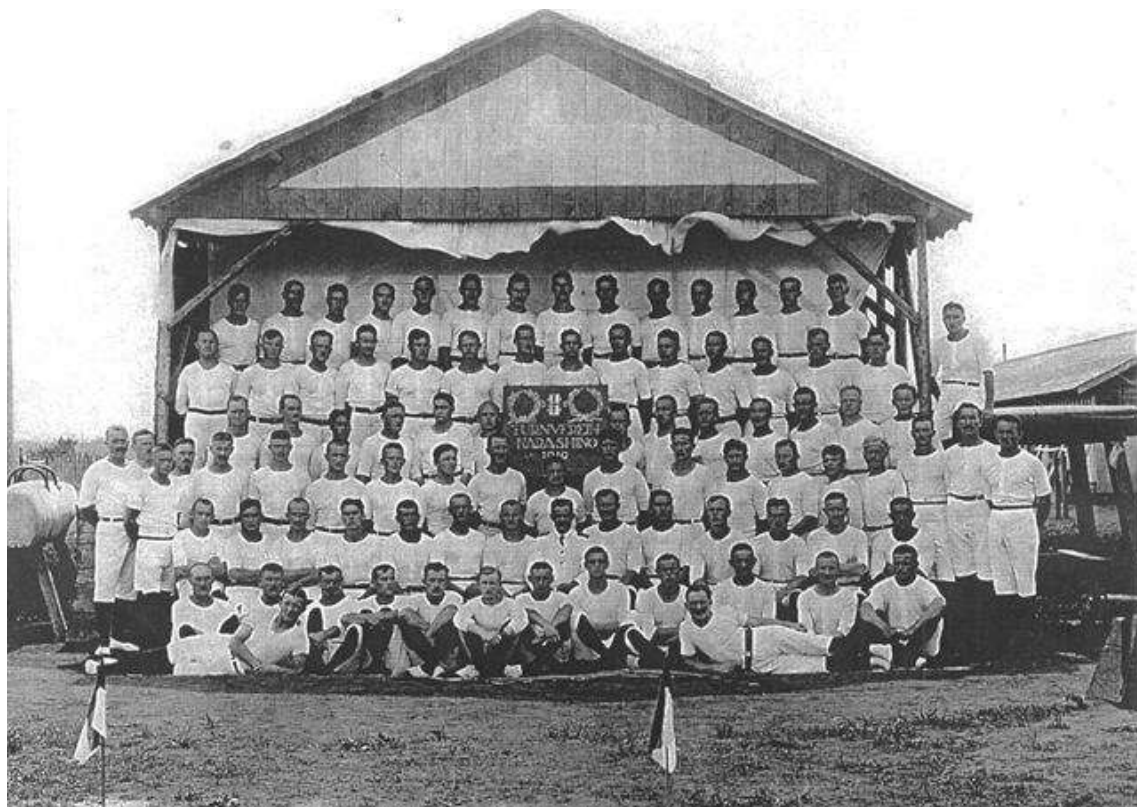


ベートーヴェン「自然における神の栄光」

室内で撮った、ちょっと暗い写真ですが、オーケストラの後ろに、合唱団がずらっと並んでおります。またお気づきのように、先日、3ヶ月ほど前になりますか、10月31日のニュースはドイツ各地で宗教改革500年の式典が開かれたと報じていましたので、習志野の地にオーケストラというものが伝来してから、ちょうど100年を迎えたわけです。

これ以降、大正8年のクリスマスに彼らがここを解放されるまで、頻繁に演奏会が行われました。先ほどのべたように「捕虜オーケストラの碑」にはオーケストラの写真がはめ込んでありまして、ちょうどその写真が撮られた場所に、その写真のアンクルで碑

が立てられているのですが、どちらかと言うところは日頃の練習場所として、演奏会のためにはちゃんとステージがありました。収容所の北側、現在長田商店さんがあるちょっと先に、“オレンジ公園”というんですか、ちょっとした児童公園があります。ここにご覧のような三角屋根の木造ステージがありました。



日本側がこれを作ったのではなく、捕虜がお金を出しあって、地元から材木を買い込んで、これを作ってしまった。そして手前の客席は野天でして、そこに兵舎の中から椅子を持ち出してきたのは演奏を聴いたわけですね。ですから、100年前、“オレンジ公園”にいわば初代・習志野文化ホールがあった、ということになるわけです。まあ、ホールというよりも野外音楽堂でしょうけれど、こんなステージがこの地にあった。そして、捕虜仲間や日本側の収容所職員だけでなく、この周辺の、実籾や長作の子供らも鉄条網をくぐって入り込んで来ては、その演奏を聴いていた。よく、刑務所みたいに塀で囲われていて、中の様子なんてわからなかったんだろう、という方がいますが、違います。鉄条網で囲っただけで、しかもところどころ破れている。近所の子供は平気で入ってしまったようです。彼らドイツ兵も売店でラムネを買い込んで、子どもらが来るのを楽しみにしていた。子どもはそのラムネをもらって、音楽を聴いたりパントマイムを見たりしていた、ということです。それだけでなく、先ほども申し上げたとおり、音楽が風に乗って、いやでも周りの住民に聴こえていた…。では、そのいくつかを聴いてみることにしましょう。



第7回演奏会 大正8年6月22日

こちらは大正8年6月22日の演奏会。その5曲目ですが、



ライヒテ・カヴァレリー、ズッペ。ズッペ作曲、喜歌劇「軽騎兵」序曲と書いてあります。『「軽騎兵」序曲』というと、え、どんな曲？』という方でも、聴いてみれば「ああ、あの曲か」という曲ではないかと思います。さわりを聴いてみましょう。



ズッペ 喜歌劇「軽騎兵」序曲

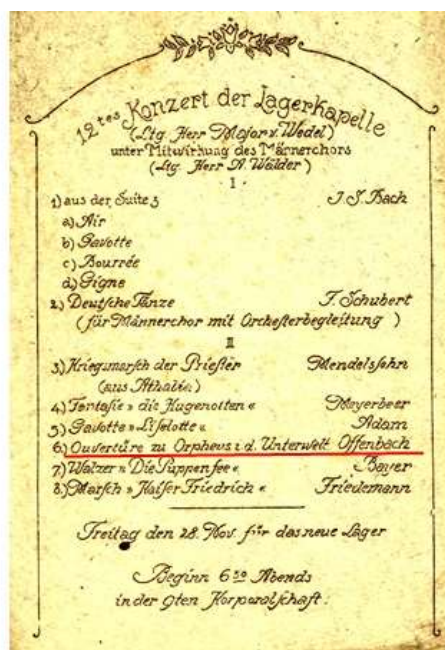
収容所の外は習志野の練兵場です。ときどき大久保の騎兵連隊が、馬で走っている。



習志野騎兵の演習

そんな風景にこの軽騎兵序曲が聴こえていた。そんな映画みたいなことが、謄写版刷りのプログラムが残っているおかげでわかるんですね。

こんなのはどうでしょう。



第12回演奏会 大正8年11月28日

大正8年11月28日の演奏会。その6曲目はオルフェウス・イン・デア・ウンターヴェルト、オッフエンバッハ作曲「地獄のオルフェウス」序曲っていうんですが、地獄のオルフェウスってどんな曲だろう？ ご存知ですかね。そう、あの曲です。

6) Ouverture zu Orpheus u. d. Unterwelt Offenbach



オッフェンバッハ 喜歌劇「天国と地獄」序曲

おなじみの「天国と地獄」ですね。どこかの小学校で運動会でもやっているのかな、というところですが、これが100年前、他でもないこの東習志野の空に響いていたのですから、皆さん想像してみてください。

ミリエスは、ヨアヒムというヴァイオリンの巨匠の弟子だったと言いましたが、そのヨアヒムは作曲家ブラームスの友人でした。ヨアヒムが盛んに演奏したブラームスの曲に、ハンガリア舞曲というのがあります。



第2回芸術家コンサート 大正8年10月1日

11. Ungarische Tänze No. 5 u. 6. Brahms

習志野捕虜オーケストラは大正8年10月1日の演奏会で取り上げています。



ブラームス ハンガリア舞曲第5番

次に、グreekの劇音楽「ペール・ギュント」から、その中の「朝」という曲のさわりを聴いていただきましょう。これも皆さん、どこかで聴いた曲だろうと思います。習志野では、大正8年8月、

REGIELEITUNG: EDUARD LENDRICH

Personen

Frau Helene Alwing, Witwe des Hauptmanns und
Kammerherrin Alwing · Herr Dr. Lütgens
Oswald, ihr Sohn, Maler · „ Marufke
Pastor Manders · „ Köhler
Regine, Dienstmädchen bei
Frau Alwing · Voigt
Jakob Engstrand, Tischler · Lendrich

Das Stück spielt auf dem Gut der Frau Alwing
in der Nähe eines großen Fjords im westlichen
Norwegen

Zwischenaktsmusik

Zur Einführung: „Morgenstimmung“ aus der
„Ullst ad „Peer Gynt“ von
Grieg.
Vor dem 2. Aufzug: Adagio von Beethoven
Zum Abßluß: Aales Tod von Grieg
Postludium

Beginn: 7 Uhr.

イプセン「幽霊」 大正8年8月

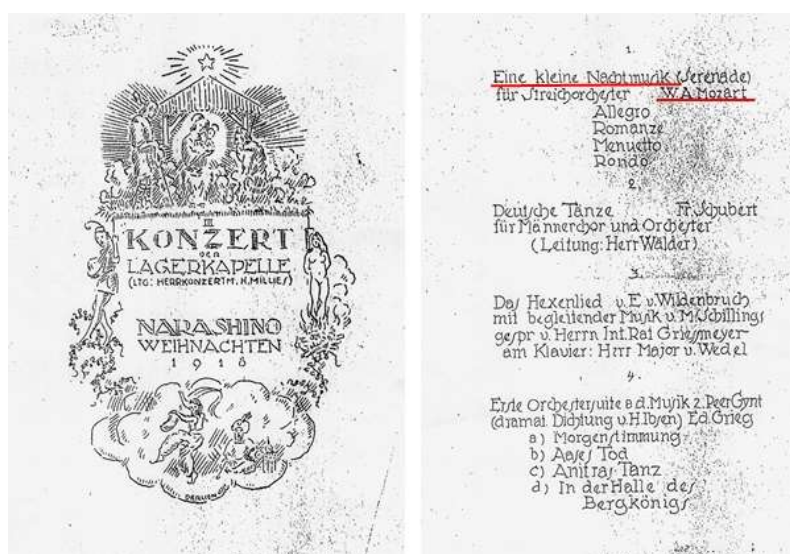
捕虜劇団がイブセンの「幽霊」という、難しいお芝居を上演したときに、伴奏音楽として演奏されています。当時はオペラだけでなく、普通のお芝居やサイレントの活動写真も、オーケストラボックスにオーケストラがいて、生演奏で伴奏をしていた訳ですね。収容所劇団もちゃんと、生伴奏をやっています。

Zur Einführung: »Morgenstimmung« aus der
Musik zu »Peer Gynt« von
Grieg.



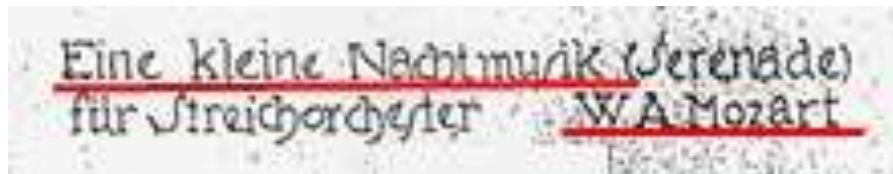
グリーク 劇音楽「ペール・ギュント」から 朝

このプログラムは、



クリスマス・コンサート 大正7年

大正7年12月24日のクリスマス・コンサートのものです。「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」モーツァルト、と書かれています。



モーツァルト アイネ・クライネ・ナハトムジーク

このモーツァルトの一番有名なメロディーが、習志野原に響いていたんですね。
そしてこちらは、



第7回演奏会 大正8年6月22日



「アン・デア・シェーネン・ブラウエン・ドーナウ、ヨーハン・シュトラウス」。ヨハン・シュトラウスの「美しく青きドナウ」ですね。ウィンナ・ワルツの傑作中の傑作、というよりもオーストリアの第二の国歌とも言われている曲ですが、先ほど、習志野にはドイツ兵だけでなくオーストリアの兵隊が収容されていたと言いました。彼らにとってこれはまさに、はるか望郷の「青きドナウ」だったことでしょう。では、大正8年6月22日の演奏会から「美しく青きドナウ」です。



ヨハン・シュトラウス2世 円舞曲「美しく青きドナウ」

この日の演奏会の最後には



「アルテ・カメラーデン」、タイケと書かれています。行進曲の本場ドイツの中でも名曲中の名曲、タイケの「旧友」を聴いてみましょう。



タイケ 行進曲「旧友」

ちなみにこの有名な行進曲を作ったタイケさん、この時まだドイツで存命です。まさか地球の裏側の、草深いナラシノなる所で、ドイツの兵隊らがこれを演奏しているとはタイケも思わなかったんじゃないでしょうか。

ところで習志野には、ミリエスが率いる捕虜オーケストラのクラシック音楽だけでなく、もう一つ、軽音楽の楽団がありました。アメリカでジャズというものが誕生したのは大正6年、とされているのですが、ある日突然、ジャズが生まれるわけではなく、その前から既に、新しい時代の音楽が生まれていた。このジャンルにジャズという名前が付いたのが大正6年、ということであって、こうした軽音楽は既に上海でも青島でも演奏されていた。そして、習志野収容所でもシェーファー楽団というバンドが出来ました。この写真をご覧ください



ジルベール 「愛らしい小さな村娘」

先ほどの“オレンジ公園”のステージ上に、白いタキシードを着こんだシェーファー楽団が勢ぞろいして、後ろにはお花も飾られています。大正8年6月22日には、こんな曲が演奏されています。ジルベール作曲、リープリッヒェ・クライネ・ディンガーヘン、「愛らしい小さな村娘」という当時の流行歌です。

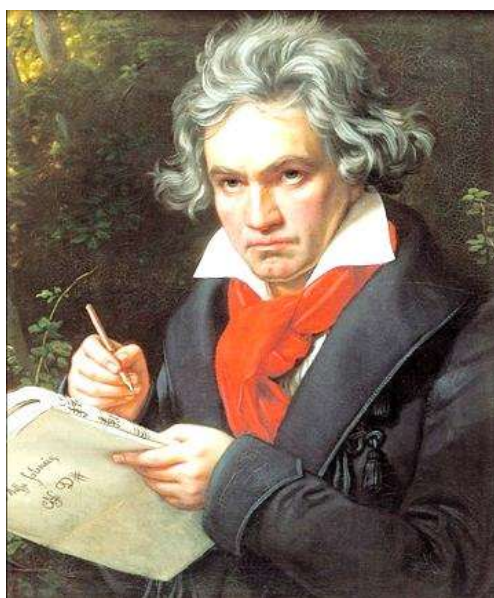
6. Liebliche kleine Dingerchen Gilbert

これは、私も調べてみて、初めて耳にしました。ベートーヴェンやモーツァルトといったクラシックの曲は現在でも演奏されますから、どんな曲かレコードを探すのはさほど難しくはないのですが、こういう流行もの、ヒットしたその当時は盛んに演奏されて、

しかしその後、まったく忘れられてしまったような曲というのは、レコードを探し出すのも大変です。今の曲なども、非常に苦労しました。

しかし今日は「名曲アルバム」をやっているわけではなくて、こういった音楽が本当に100年前、他でもないこの東習志野4丁目、5丁目界隈に流れていたということ。今日はそのことをぜひ、お土産にさせていただきたいと思います。

さて、それでは今日のお話の締めくくりに、徳島の板東収容所ではベートーヴェンの「第九」本邦初演100年ということでお祭りムードなのですが、習志野の捕虜オーケストラはこの「第九」をやったのか、やらなかったのか。その謎に迫ってみたいと思います。



「第九」、ベートーヴェンの交響曲第9番というのは全部で1時間10分もかかる大曲ですが、特にその第4楽章はオーケストラに加えて大合唱が、今お聞きいただいた、有名な「よろこびの歌」を奏でます。その歌詞は、ドイツの大詩人シラーのもので、「世界の人々よ、兄弟たらん」。身分の違いだとか、言葉の違い、民族の違いといったものを乗り越えて、手を携えようではないかと人類愛を歌い上げるわけです。ところが日本では、それを何と、収容所の中にいた捕虜が演奏した。戦争で殺し合いをやった憎しみや敵・味方の恩讐を超えて、手を取ろうではないかと捕虜が歌い上げた、というところに非常に価値があるわけですね。そういう形でこの「第九」というものが日本に伝えられたわけです。

それから、これを年末に演奏するということも、実は第一次世界大戦と深い関係があります。第一次世界大戦がそれまでの歴史に例のない、悲惨な戦争としてドイツの敗北をもって終結したとき、時の大指揮者アルトゥール・ニキッシュという人が、ドイツ、

ライプツィヒの町のオーケストラを指揮して、板東で日本初演されたのと同じ大正7年の大晦日に、平和のメッセージとしてこの「第九」を演奏した。ライプツィヒではこれが年末の伝統になりまして、全ヨーロッパに向けて放送されるようになり、これは現在でも続けられているそうです。今年はこれも、ちょうど100年になりますね。そしてこれを真似て、日本でも戦前（昭和12年（1937））、NHKがラジオで大晦日に「第九」を流したということがあったようです。そうしたことが、太平洋戦争の後、「暮れの第九」が毎年盛んになる伏線になっていたようです。



アルトゥール・ニキシュとライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団

さて、この「第九」が習志野では演奏されなかったのか？ 結論を先に言いますと、間違いなく習志野でも「第九」が演奏されている、という証拠になるようなものは、いまだ見つかっていません。しかし、もしかすると…？と思われるような話は残っていますので、今日は最後にそれをぜひご紹介しておきたいと思います。

2020年にまた東京でオリンピックが行なわれる、ということで期待も大きいわけですが、話は1964年、昭和39年の東京オリンピックです。第一次世界大戦の後、世界はさらに悲惨な大戦争を経験しました。その第二次世界大戦が終った後、ドイツは東西に分裂してしまいました。米ソ冷戦の最前線として、ベルリン市内には「壁」が作られてしまった。しかしその頃、オリンピックだけは「東西ドイツ合同チーム」という形で参加していました。今またピョンチャンで、南北朝鮮の統一チームを、といった話が出ているようですが、この頃は東西ドイツの合同チームが出来ていました。そして、国旗の代りにドイツの三色旗の真ん中に五輪マークを入れた旗を使い、ドイツ選手が金メダルを取ったときには、国歌の代りにベートーヴェンの「よろこびの歌」を流した。そん

なことがあったわけです。しかしこれも、昭和39年の東京オリンピックが最後でして、それ以後は、西ドイツは西ドイツ、東ドイツは東ドイツということになってしまいました。オリンピックでは東ドイツの方が強くて、冷戦終結までの間、オリンピックの度に、東ドイツの国歌だのソ連の国歌だの、表彰式でよく聴かされたのを覚えていらっしゃる方も多いことでしょう。



京成実臼駅(昭和39年)

さて、これはその昭和39年の実臼駅です、習志野ではこの時、コレラ患者が発生しまして、オリンピックを前に大騒動になりました。そんな時代のお話です。

地元の方はよく御存知でしょうけれども、その実臼三叉路に「実臼飯店」という中華料理屋さんがありました。その谷原三郎さんにうかがった話です。

まだテレビも珍しかった時代、ある日、実臼飯店のホールに近所の人らがおおぜい押しかけて、テレビのスポーツ中継に熱中している。それが何の中継だったのか、谷原さんの記憶も定かではないのですが、しかしあんな大騒ぎはおそらく東京オリンピックではないか。私も仕事にならなくて、厨房から出てきて一緒にテレビを見ていた。確か、誰か日本の選手が出てきつと金メダルが期待できるんじゃないかという話だった。ところが、その日本選手は負けてしまったらしい。「あ～あ！」と残念がる声が響く中で、ブラウン管に表彰式が映し出され、音楽が鳴った。すると、ずっとテレビを見ていた谷原さんのお母さんが「おや、これはドイツの兵隊の歌だね」と言った、というのです。

話としてはこれだけなのですが、谷原さんのお母さんは、かつて収容所があった頃、ドイツ兵の洗濯物の請負に通っていました。シーツが1枚いくら、枕カバーはいくらと、洗濯屋をしていたのですね。そして、教育はない方だったそうですが、大変耳のいい方だった。といいますのは、ずっと後に、このお母さんが雑巾がけをしながら口ずさんでいたメロディーが、あるドイツの民謡であることに谷原さんが気付いたのです。それは、こんな曲でした。



これはシュナーダヒュップフェルという歌ですが、歌詞はその場で、即興で作ります。替え歌ですね。一人が歌うと、全員で「ホロダリーディオ ホロダロー ホロダリディア ヴォスゾークステンダ」とリフレインを歌う。そして、ハイ次の人、と順番に回して行って、替え歌に詰った人がその場のビール代を持たなければならないという遊び歌です。難しく言うと「ロンド形式」という訳ですが、風刺のきいた替え歌をリフレインでつないでいって笑わせる。日本でもそんなのがありましたね。思い出しませんか？ 「あーあーあ やんなっちゃった あーあー驚いた」とまあ、あんな類の歌ですね。

なぜそんなドイツの民謡など知っていたのか？ それは収容所から毎日のように聞こえてきていたから、としか考えられない。先ほどご紹介した塹壕の「聖しこの夜」だとか、第二次大戦の「リリー・マルレーン」だとか、あるいはよく、長崎の方の隠れキリシタンの里にスペインの古い賛美歌らしきものが残っていた、なんていう話を聞きますが、歌というものはこうやって、人から人へ、いとも簡単に国境の壁や言葉の壁をのり越えてしまうものですね。その谷原さんのお母さんが、テレビを見ていて「おや、ドイツの兵隊の歌だね」と言ったという。それはいったい何なのか？

ということで、私もNHKに行って、東京オリンピックの放送記録をいろいろ調べたことがあります。果して東京オリンピックに、谷原さんがおっしゃるような、日本選手とドイツ選手がメダルを競う場面があったのか？ そして、もしドイツ選手が金メダルを取ったのだとすれば、そこで流れた「ドイツの兵隊の歌」とは、合同チームの歌、つまり「よろこびの歌」である。習志野の捕虜も「よろこびの歌」を演奏していた。それが谷原さんのお母さんの耳に残っていた、ということになるわけです。

調べてみた結果、たった1つだけ、そのような場面が見つかりました。女子80メートル・ハードル。依田郁子という日本選手に、日本中の期待が高まっていました。この

依田選手、ちょっと変った癖があり、こめかみに白く「サロメチール」という筋肉マッサージの薬を塗り、箒を持ってきて自分のコースを履き清めたり、レモンをかじって逆立ちしてみたり、その頃流行っていた村田英雄の「王将」を口笛で吹いたり、「変な人」として注目されていた。記録映画にその映像が残っています。やがてピストルが鳴り、依田が飛び出したものの、優勝は東ドイツのバルツァー。日本中が、谷原さんの言うとおり「あ〜あ」と残念がっていると、表彰式が始まります。メインポールに上がるドイツ合同チーム旗。そして国歌の代りに、ベートーヴェンの「よろこびの歌」が確かに流れます。

映像が残っていますので、確認していただきましょう。





表彰台に立つカリン・バルツァー（後）

メインホールに合同チームの旗が上って、確かにベートーヴェンが流れています



金:ドイツ 銀:ポーランド 銅:オーストラリア

しかし、これ以上のことがわからないのです。

あの日、実籾飯店のブラウン管に映っていたのが東京オリンピックである、という証明ができない。お母さんはもちろん、谷原さんも私にこの話を聞かせてくれた後、既にお亡くなりになっています。もし、お母さんがお元気な内であれば、こんなビデオでも何でも見てもらって、確かめる術もあったのですが、今となってはもうわからない。時間の壁の向こうに消えてしまったのですね。

もし、かすかな期待が残されているとすれば、54年前、私も実籾飯店でこのテレビ

を見た記憶があるよ、という方が残っていないか、ということでしょうね。

そんな次第で、習志野でドイツ兵が「第九」を演奏したと言い切るわけにはいかないわけですが、しかし「世界の人々よ、兄弟たらん」、何で殺し合いなんかやらなきゃならないんだ、というこの「第九」のメッセージは、板東だけでなく、当時捕虜となっていたドイツ兵全員に共通する思いだったことでしょうね。

さて、最後のスライドをご紹介します。



大正8年のクリスマスの朝に、習志野にいたドイツ兵は解放され、津田沼駅から一隊は神戸、もう一隊は横浜に出て、家族が待つ祖国へと帰りました。また、最後に後片付け部隊が残りまして、年が明けた大正9年の1月26日、ドイツ側の総大将だったワルデック総督が、最後の一人として習志野を後にします。この写真は、西郷所長の後を継いだ山崎所長とワルデック総督が、別れの握手を交わしている所です。

今日のお話の最初に、こういった音楽をたどることは異文化との出会いを追体験することだと申し上げました。今日、収容所跡に立って耳を澄ましていただくと、風の音の

中にまだそんな100年前の余韻が残っているかも知れない、と言ったならば、少し感傷的すぎるでしょうかね。しかし、異文化との出会いと理解、それこそが平和の土台である。第一次世界大戦という大戦争の中で、故郷を遠く離れた習志野の地で彼らが残していったもの。それは、「戦争と平和」という大きなテーマを考える上で非常に重要な材料を与えてくれたのだと言うことができます。

至らないお話になりましたが、最後まで、ご清聴ありがとうございました。

(2018年2月3日 東習志野コミュニティセンター)

***著作権について**

このPDFデータを複製し、またはプリントアウトしてご友人等に配布されることについて予め同意します。 講師

年月日／催事名	作曲者	曲目	備考
1915.12.25 大正4年クリスマスコンサート		クリスマスの鐘 Weihnachtsklänge	不詳。クリスマス・メドレーか？
		ロッティのアリア Arie von Lotti	Antonio Lotti (1667-1740)
	シューベルト Schubert	劇音楽「ロザムンデ」から間奏曲 Zwischenakt aus Rosamunde	
	ヴェーバー Weber	舞踏への勧誘 Aufforderung zum Tanz	
	ローデ P. Rode	エア・ヴァリエ Air varie	Jacques Pierre Rode (1774-1830)
	ヘンデル Händel	ブーレ Bourree	
	メンデルスゾーン Mendelssohn	ピアノ三重奏曲第1番からアレグロとアンダンテ Allegro und Andante aus dem 1. Trio	
	ゴダール Godard	ジョスランの子守唄 Wiegenlied aus Jocelyn	
1917 ミリエス演奏会		おお 誉れ高きドイツよ O Deutschland, hoch in Ehren	作詞Ludwig Bauer／作曲 Hugo Pierson (1859)
	ハイドン Haydn	弦楽四重奏曲ニ短調「五度」 Quartett D-moll "Quinten-Quartett"	
	シューマン Schumann	旅へのあこがれ Wanderlied	Op.35-3
	メンデルスゾーン Mendelssohn	挨拶 Leise zieht durch mein Gemüt	Op.19-5
	ショランダー Sven Scholander	春の交響曲 Frühlingssymphonei	Sven Scholander (1860-1939)
	コーテ R. Kothe	太陽と雨 Sonne und Regen	Robert Kothe (1869-1947)
	ミリエス Millies	民謡の調べで（シュトゥルム） Im Volkston a) 君に出会ったとたん a) Als ich dich kaum gesehen b) 手紙を書かにならん b) Einen Brief soll ich schreiben	
		竖琴を弾く娘の歌（シュトゥルム） Lied des Harfenmädchens	
		月の光（シュトゥルム） Mondlicht	
		褐色の髪の娘 Ein schwarzbraunes Mädel	作詞不詳

		閉じておくれ、僕の眼を（シュトゥルム） Schliesse mir die Augen beide	
1917.10.31 宗教改革400年記念のタベ	バッハ J. S. Bach	ハルモニウムのための前奏曲 Praeldium für Harmonium	
	ルター Luther	神は我がやぐら Ein feste Burg ist unser Gott	
	ヘンデル Händel	ラルゴ Largo	
	バッハ J. S. Bach	ブーレ Bourree	
		サラバンド Sarabande	
	ハイドン Haydn	セレナーデ Serenade	
	モーツァルト Mozart	アヴェ・ヴェルム・コルプス Ave verum corpus	
	ベートーヴェン Beethoven	自然における神の栄光 Die Himmel ruhmen des Ewigen Ehre	
		交響曲第5番 aus Symphony Nr. 5	ハインリッヒ・ハムの日記による
1918.10. 第1回コンサート	ズッペ Suppe	序曲「詩人と農夫」 Ouverture: Dichter u. Bauer	ミリエス日記
	バッハ J. S. Bach	ブーレ Bourree	ミリエス日記
	ハイドン Haydn	セレナーデ Serenade	ミリエス日記
	シベリウス Sibelius	悲しき円舞曲 Valse triste	ミリエス日記
	フロトー Flotow	歌劇「マルタ」による幻想曲 Fantasie a. d. Oper "Martha"	ミリエス日記
	フリーデマン Friedemann	行進曲「フリードリッヒ皇帝」 Marsch: Kaiser Friedrich	ミリエス日記
	ドリーブ Delibes	「 Coppélia 」から ワルツ Walzer aus Coppelia	ミリエス日記
	リンケ Lincke	リンケ大メドレー Großer Potpourri von Lincke	ミリエス日記／Paul Lincke (1866-1946)
	メルケル ト Merkelt	大公の擲弾兵 Des Großherzogs Grenadiere	ミリエス日記
1918.11.03 第7回室内楽演奏会	シューベルト Schubert	好奇心の強い男 Der Neugierige	ミリエス日記／「美しき水車 小屋の娘」から、D.795-6

		セレナーデ Ständchen	ミリエス日記／D.957-4
		弦楽四重奏曲第 10 番 変ホ長調 Streichquartett Op.125 No.1	ミリエス日記
		君こそ我が憩い Du bist die Ruh'	ミリエス日記／D.776
		さすらい人 Der Wanderer	ミリエス日記／D.489、またはD.649
1918.11.17 第 2 回コンサート	メンデルスゾーン Mendelssohn	序曲「フィンガルの洞窟」 Ouvverture: Fingals Höhle	ミリエス日記／ワルデック 総督誕生日祝賀
		ヴァイオリン協奏曲 Violinkonzert	ミリエス日記／ワルデック 総督誕生日祝賀
	ボワエルデュ Boieldieu	序曲「バグダッドの太守」 Ouvverture: Der Calif von Bagdad	ミリエス日記／ワルデック 総督誕生日祝賀
	ヴェルダー Wälder	男声合唱のための 3 つの歌曲 3 Lieder für Männerchor a) 吟遊詩人 a) Der Barde b) 書き終えた手紙 b) Abgefast c) 心に太陽を持て c) Hab' Sonne	ミリエス日記／ワルデック 総督誕生日祝賀
	ブラームス Brahms	2 つのハンガリー舞曲 Zwei Ungarische Tänze	ミリエス日記／ワルデック 総督誕生日祝賀
1918.12 第 8 回室内楽演奏会	モーツァルト Mozart	弦楽四重奏曲 ト長調 Streichquartett G-dur	ミリエス日記／ト長調の四重奏曲はKV.80、KV.156、KV.387の 3 つ。そのいずれか。
	タルティーニ Tartini	ヴァイオリンとハルモニウムのためのソナタ ホ短調 Sonate mit Harm. e-moll	ミリエス日記／Op.1-5か Op.2-6
1918.12. 大正 7 年クリスマス礼拝		きよしこの夜 Stille Nacht	
	シューベルト Schubert	ドイツ・ミサ曲 Deutsche Messe	
	ベートーヴェン Beethoven	夜の讃歌 Hymne an die Nacht	Op.57(熱情ソナタ)のアンダンテ
		いざ歌え、いざ祝え O du fröhliche	
1918.12. 第 3 回コンサート (大正 7 年クリスマス	モーツァルト Mozart	アイネ・クライネ・ナハトムジーク Eine kleine Nachtmusik	

コンサート)	シューベルト Schubert	ドイツ舞曲 Deutsche Tänze	
	シリングス M. Schillings	魔女の歌 Das Hexenlied	マックス・フォン・シリングス (1868-1933) 作曲のメロドラマ(Op. 15)
	グリーク Grieg	劇音楽「ペール・ギュント」 組曲第 1 番 Erste Orchestersuite a. d. Musik z. Peer Gynt	
1919.01.08 演劇「電話の秘密」	オーシャイト Oscheit	行進曲「ジプシーの野営にて」 Marsch: Im Zigeunerlager	Max Oscheit (1880-1923)
	オッフェンバッハ Offenbach	「ホフマン物語」から 間奏曲と舟歌 Intermezzo u. Barcarolle "Hoffmanns Erzählungen"	
	リンゼイ Lindsay	アイシャ Aisha	John Lindsay-Theimer作曲、Aisha. Indian intermezzo (1912)
	タイケ Teike	行進曲「旧友」 Marsch: Alte Kameraden	
1919.02.22 スペイン風邪犠牲者慰霊祭		主にまかせよ Harre meine Seele	(讃美歌291番)
	ヘンデル Händel	ラルゴ Largo	
		我が信ずるイエス Jesus meine Zuversicht	Johann Crüger作曲 (1658)
		いと静かに彼らは憩う Wie sie so sanft ruhen	詩はF.G. Klopstock (1724–1803) 。Friedrich B. Beneken (1760-1818) の曲、またJosef G. Rheinberger (1839-1901) にも同名の曲がある。
1919.03.05 朗読のタベ	メンデルスゾーン Mendelssohn	わが願いはこの愛すべてを Ich wollt, meine Lieb...	Op.63-1
		挨拶 Gruss	Op.63-3
		秋の歌 Herbstlied	Op.63-4
1919.03.09 ハンス・ミリエス・コンサート	ベートーヴェン Beethoven	ヴァイオリン協奏曲ニ長調、作品 6 1 Violin-concert, D-dur, Op.61	
	サン・サーンス Saint-Saens	序奏とロンド・カプリチオーソ Introduction et Rondo capriccioso	

	シューマン Schumann	トロイメライ Träumerei
	サラサーテ P. de Sarasate	ツィゴイネルヴァイゼン Zigeunerweisen
1919.03.30 第4回コンサート	モーツァルト Mozart	歌劇「魔笛」序曲 Ouvertüre zur Zauberflöte
		ヴァイオリンとヴィオラのための協奏交響曲 Symphonie concertante für Violine, Viola u. Klavier
	フォルクマン Rob. Volkmann	セレナーデ ニ短調 作品69 Serenade Op. 69 in D-moll
	イェンゼン Jensen	「婚礼の音楽」から 婚礼の行列 Festzug aus der Hochzeitmusik Adolf Jensen (1837-1879)
1919.05.24 合唱協会リートのタベ	ヴェンゲルト J. Wengert	祝いの挨拶 Festgruß, Op.22 Julius Wengert (1871-1925)
	メンデルスゾーン Mendelssohn	トルコの酒場の歌 Türkisches Schenkenlied, Op.50-1
	レーヴェ Loewe	水の精 Der Nock, Op.129-2
	リラ J. W. Lyra	我がミューズ Meine Muse Justus Wilhelm Lyra (1822-1882)
	ジルヒャー Silcher	選ばれし者（シュヴァーベン民謡） Die Auserwählte (Schwäb. Volkslied)
	レーヴェ Loewe	魔王 Erlkönig
	ヴェンゲルト J. Wengert	われ再び帰る Ich kehre wieder, Op.16
	ツェルナー C. Zöllner	宿屋 Einkehr Carl Friedrich Zöllner (1800-1860)
	メンデルスゾーン Mendelssohn	タベの歌 Abendlied
	クロマー C. Kromer	森の泉のほとり Am Brünnelein im Walde, Op.124 Karl Kromer (1865-1939)
	バルダムス G. Bardamus	楽しき貧困 Fröhliche Armut Gustav Baldamus (1862-1933)
	シュヴァルツ J. Schwarz	故郷 Die Heimat
	ジルヒャー Silcher	別れ（シュヴァーベン民謡） Abschied (Schwäb. Volkslied)

1919.06.08 大正 8 年聖霊降臨祭	イエンゼン Jensen	管弦楽のための「婚礼の音楽」 Hochzeitmusik für Orchester a) 婚礼の行列 a) Festzug b) 花嫁の歌 b) Brautgesang c) 輪舞 c) Reigen d) セレナーデ d) Notturmo (Nachtlied)
	メンデルスゾーン Mendelssohn	狩人の別れ Wer hat dich, du schöner Wald
	クロイツァー Kreutzer	歌劇「グラナダの夜営」序曲 Ouverture zur Oper "Das Nachtlager in Granada" Conradin Kreutzer (1780-1849)
1919.06.22 第 7 回コンサート	オーシャイト Oscheit	行進曲「ジプシーの野営にて」 Marsch: Im Zigeunerlager Max Oscheit (1880-1923)
	ボワエルデュ Boieldieu	序曲「バグダッドの太守」 Ouverture: Der Calif von Bagdad
	ハイドン Haydn	メヌエット Menuett
	コムツァーク Komzak	かわいい民謡 Volksliedchen Karl Komzak (1850-1905)
	レハール Lehar	円舞曲「ジプシーの恋」 Walzer "Zigeunerliebe"
	ズッペ Suppe	序曲「軽騎兵」 Ouverture: Leichte Kavallerie
	ジルベール Gilbert	愛らしい小さな村娘 Liebliche kleine Dingerchen Jean Gilbert (本名 Max Winterfeld) (1879-1942)
	ヨハン・シュトラウス Johann Strauß	円舞曲「美しく青きドナウ」 Walzer "An der schönen blauen Donau"
	タイケ Teike	行進曲「旧友」 Marsch: Alte Kameraden
1919.07.03 文化・体育祭	ベッカー Becker	行進曲「十字架と王冠」 Marsch: Kreuz und Krone Adolf Becker (1870-1941)
	ヴェルダー Wälder	心に太陽を持て "Hab Sonne im Herzen"
	オーテグラウヴェン A. von Othegraven	クーアプファルツの獵兵 "Der Jäger aus Kurpfalz" August von Othegraven (1864-1946)
	メンデルスゾーン Mendelssohn	序曲「フィンガルの洞窟」 Die Hebriden
	ハンス・ヴァーグナー H. Wagner	「ゴートの忠誠」 "Gotentreue" Hans Wagner-Schönkirch (1872-1940)

	モーツァルト Mozart	アイネ・クライネ・ナハトムジーク Eine kleine Nachtmusik
	シューベルト Schubert	ドイツ舞曲 Deutsche Tänze
	コムツァーク Komzak	かわいい民謡 Volksliedchen
	ヨハン・シュトラウス Johann Strauß	円舞曲「美しく青きドナウ」 Walzer "An der schönen blauen Donau"
1919.07.20 第8回コンサート	モーツァルト Mozart	アイネ・クライネ・ナハトムジーク Eine kleine Nachtmusik
	ワーグナー Wagner	歌劇「ローエングリン」前奏曲 Vorspiel zu Lohengrin
		楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」から ヴァルターの優勝の歌 Walters Preislied a. "Meistersinger"
		夢（トリスタンとイゾルデのための習作） Träume (Studie z. Tristan u. Isolde)
		歌劇「タンホイザー」から大行進曲 Einzug der Gäste a. d. Wartburg aus "Tannhäuser"
1919.07.29 男声合唱団民謡のタベ	クレムザー Ed. Kremser	民の歌 Das Volkslied Eduard Kremser (1838-1914)
	ジルヒャー Silcher	喜びと共にいずこへ Wohin mit der Freud'?
		ローレライ Loreley
		心 s Herz
		ぼくのあの娘 Mei Maidle
		別れ Trennung
		スイス人 Der Schweizer
		狩人の喜び Jägers Lust
	コシャート Koschat	ヴェルター湖にて Am Wörther See Thomas Koschat (1845-1914)
1919.08. 演劇「幽霊」（イブセン）	グリーク Grieg	劇音楽「ペール・ギュント」から 朝 Morgenstimmung aus der Musik zu "Peer Gynt"
	ベートーヴェン Beethoven	アダージョ Adagio

	グリーク Grieg	劇音楽「ペール・ギュント」から オーゼの死 Aases Tod	
		後奏曲 Postludium	
1919.08.25 ハンス・ミリエスお別れコンサート	ユーレク Jurek	行進曲「ドイツ・マイスター連隊」 Marsch: Deutschmeister Regiment	Wilhelm August Jurek (1870-1934)
	アダン Adam	歌劇「われもし王なりせば」序曲 Ouvertüre: Wenn ich König wär'	
	フランツ・ヴァーグナー F. Wagner	昔の歌 Ein altes Lied	Josef Franz Wagner (1856-1908)
	ヨハン・シュトラウス Johann Strauß	円舞曲「春の声」 Walzer: Frühlingsstimmen	
	アルベール Albert	間奏曲「桜の花」 Intermezzo Kirschblüte	Louis Albert
	トマ Thomas	歌劇「ミニヨン」による幻想曲 Fantasie aus der Oper "Mignon"	
	チブルカ Czibulka	舞踏会のあとの愛の夢 Liebestraum nach dem Balle	Alphons Czibulka (1842-1894)
	マクベス Macbeth	忘れな草 Vergiß mein nicht!	Allen Macbeth (1856-1910)、"Forget Me Not"Op.22
	アーヴィング Irwing	トゥーステップ「娘は誰でも彼氏が必要」 Two Step: Jedes Mädcl braucht 'nen Mann	不詳
	レハール Lehar	円舞曲「侯爵の子」 Walzer: Fürstenkind	
	モレーナ Morena	大メドレー「大都会の響き」 Großes Potpourri: Klänge aus d. Metropol	不詳
	ロージー Rosey	行進曲「新婚旅行」 Marsch: Flitterwochen	George Rosey（本名George E. Rosenberg）(1864-1936)
1919.09.28 第１０回コンサート	ワーグナー Wagner	歌劇「タンホイザー」から大行進曲 Tanhäuser -Einzug der Gäste	
	ハイドン Haydn	セレナーデ Serenade	
	メンデルスゾーン Mendelssohn	序曲「フィンガルの洞窟」 Hebriden	
	ミリエス Millies	ドイツ行進曲 Deutscher Marsch	
	フロトー Flotow	歌劇「マルタ」による幻想曲 Fantasie a. d. Oper "Martha"	
	コムツァーク Komzak	かわいい民謡 Volksliedchen	

	シベリウス Sibelius	悲しき円舞曲 Valse triste	
	メルケルト Merkelt	大公の擲弾兵 Des Großherzogs Grenadiere	不詳
1919.10. 演劇「社会の柱石」（イブセン）	ベートーヴェン Beethoven	イ長調交響曲のアレグレット Allegretto aus der Symphonie A-dur	
	フランツ・ヴァーグナー F. Wagner	昔の歌 Ein altes Lied	Josef Franz Wagner (1856-1908)
	ゴダール Godard	子守唄 Bercuse	
	グルック Gluck	アンダンテ（精霊の踊り） Andante (Reigen seliger Geister)	
1919.10.01 第2回芸術家コンサート	フェトラス Fetras	ヒンデブルク行進曲 Hindenburg-Marsch	Oscar Fetras (1854-1931)
	バルフェ Balfe	歌劇「ジプシーの娘」序曲 Ouverture: Die Zigeunerin	Michael W. Balfe (1808-70)
	メンデルスゾーン Mendelssohn	春の歌 Frühlingslied	
	ヴェルディ Verdi	歌劇「トロヴァトーレ」による幻想曲 Fantasie a. d. Op. "Der Troubadour"	
	ルービンシテイン Rubinstein	メロディー Melodie	
	ツィーラー Ziehrer	円舞曲「ヴィーン娘」 Walzer "Wiener Mad'ln"	
	シャルヴェンカ Scharwenka	ポーランド舞曲 Polnischer Tanz	Franz Xaver Scharwenka (1850-1924)
	ビゼー Bizet	歌劇「カルメン」による幻想曲 Fantasie a. d. Op. "Carmen"	
	シュピンドラー Spindler	軽騎兵の騎行 Husarenritt	Fritz Spindler (1817-1905)
	ジョーンズ Jones	“ゲイシャ”から ミモザ・ワルツ " Mimosa Walzer" a. Geisha	Sidney Jones (1861-1946)
	ブラームス Brahms	ハンガリー舞曲第5番・第6番 Ungarische Tänze Nr. 5 u. 6	
	ベッカー Becker	行進曲「十字架と王冠」 Marsch: Kreuz und Krone	Adolf Becker (1870-1941)
1919.10.05 ハンス・マルフケ謝恩のタベ	ワーグナー Wagner	楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」から ヴァルターの優勝の歌 Walter's Preislied a. "Die Meistersinger v. Nürnberg"	

	ドヴォルザーク	ユモレスク	
	Dvorak	Humoreske, Op.101	
	ハイドン	メヌエット	
	Haydn	Menuett	
	ヴィエニャフスキ	スケルツォ・タランテラ	
	Wieniawski	Scherzo-Tarantella	
	シューマン	ミルテの花 作品25から Myrthen Op.25 a) 自由な心 a) Freisinn b) 東方のばらより b) Aus den östlichen Rosen c) 大尉の妻 c) Hauptmanns Wieb	
1919.10.15 アルフォンス・ヴェルダー謝恩コンサート	シューマン	リーダークライス 作品39から Liederkreis Op.39 a) 森のささやき a) Waldesgespräch	
	ヴェルディ	歌劇「リゴレット」による幻想曲	
	Verdi	Fantasie a. d. Op. "Rigoletto"	
	フォン・ヴェーデル	大分行進曲	
	v. Wedel	Oita-Marsch	
	ヴェルダー	捕虜の歌	
	Wälde	Kriegsgefangen	
	バッハ	ブーレ	
	J. S. Bach	Bourree	
	ヘンデル	「ユダス・マカベウス」からシモンのアリア	
	Händel	Arie des Simon a. Jadas Maccabäus	
	ハイドン	軍隊交響曲	
	Haydn	Militärsymphonie	
	ハンス・ヴァーグナー	「ゴートの忠誠」	Hans Wagner-Schönkirch
	H. Wagner	"Gotentreue"	(1872-1940)
	コシャート	ヴェルター湖にて	Thomas Koschat
	Koschat	Am Wörthersee	(1845-1914)
	グリーク	ノルウェーの踊り	
	Grieg	Norwegischer Tanz	
	ラーデッケ	若き日より	Robert Radecke
	R. Radecke	Aus der Jugendzeit	(1830-1911)
	オーテグラヴェン	クーアプファルツの獵兵	August von Othegraven
	A. von Othegraven	"Der Jäger aus Kurpfalz"	(1864-1946)
	ボッケリーニ	メヌエット	
	Boccherini	Menuett	

1919.11.28 第 1 2 回コンサート	ヨハン・シュトラウス Johann Strauß	円舞曲「美しく青きドナウ」 Walzer "An der schönen blauen Donau"
	バッハ J. S. Bach	管弦楽組曲第 3 番から aus der Suite 3 a) アリア a) Air b) ガヴォット b) Gavotte c) ブーレ c) Bourree d) ジーグ d) Gigue
	シューベルト Schubert	ドイツ舞曲 Deutsche Tänze
	メンデルスゾーン Mendelssohn	劇音楽「アタリー」から 僧侶の戦争行進曲 Kriegsmarsch der Priester (aus Athalia)
	マイヤベーア Meyerbeer	歌劇「ユグノー教徒」による幻想曲 Fantasie "die Hugenotten"
	アダム Adam	リーゼロッテのガヴォット Gavotte "Liselotte" 不詳
	オッフェンバッハ Offenbach	喜歌劇「天国と地獄」序曲 Ouverture zu Orpheus i. d. Unterwelt
	バイヤー Bayer	円舞曲「人形の妖精たち」 Walzer "Die Puppenfee" Josef Bayer (1852-1913)
	フリーデマン Friedemann	行進曲「フリードリッヒ皇帝」 Marsch: Kaiser Friedrich